

世界の中心で、愛をさけぶ 片山恭一





世界の中心で、愛をさけぶ

片山恭一

片山恭一（かたやま・きょういち）

1959年愛媛県生まれ。福岡県在住。九州大学卒業後、1986年『気配』で「文学界」新人賞を受賞しデビュー。主な作品に『きみの知らないところで世界は動く』（新潮社刊、ポプラ社より復刊）、「ジョン・レノンを信じるな」（角川書店刊）、「満月の夜、モビイ・ディックが」（小社刊）、「空のレンズ」（ポプラ社刊）がある。最新刊は『もしも私が、そこにいたら』（小社刊）。

販売 新里健太郎

宣伝 庄野 樹

制作 山崎法一

編集 石川和男

世界の中心で、愛をさけぶ

2001年4月20日初版第一刷発行

2004年1月10日 第二十一刷発行

著 者 片山恭一

発行者 佐藤正治

発行所 株式会社小学館

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1

電 話 編集 03-3230-5720

制作 03-3230-5333

販売 03-5281-3555

振替 00180-1-200

印刷所 文唱堂印刷株式会社

*造本にはじょうぶん注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、「制作局」あてにお送りください。送料当社負担にてお取り替いたします。

☑ 本書の一部または全部を無断で複写（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

©Kyoichi Katayama 2001 Printed in Japan

ISBN4-09-386072-6

第一章

1

朝、目が覚めると泣いていた。いつものことだ。悲しいのかどうかさえ、もうわからな
い。涙と一緒に、感情はどこかへ流れていった。しばらく布団のなかでぼんやりしている
と、母がやって来て、「そろそろ起きなさい」と言った。

雪は降っていないが、道路は凍結して白っぽくなっていた。半分くらいの車はチェ
ーンを付けて走っている。父が運転する車の助手席に、アキの父親が^{すわ}坐った。アキの母親
とほくは後部座席に乗り込んだ。車が動きだした。運転席と助手席の男たちは、雪の話は

かりしている。搭乗時間までに空港に着けるだろうか。飛行機は予定通りに飛ぶだろうか。後部座席の二人はほとんど喋らない。ぼくは車の窓から、通りすぎていく景色をぼんやり眺めていた。道の両側に広がる田畑は、見渡すかぎりの雪野原だった。雲のあいだから射す太陽の光が、遠い山の稜線をきらめかせた。アキの母親は、遺骨の入った小さな壺を膝に抱いている。

峠に差しかかると雪が深くなった。父親たちはドライブインに車を停めて、タイヤにチエーンを巻きはじめた。そのあいだに近くを歩いてみることにした。駐車場の向こうは雑木林だった。踏み荒らされていない雪が下草を覆い、木々の梢に降り積もった雪が、ときどき乾いた音をたてて地面に落ちた。後ろを振り返ると、ガードレールの彼方に冬の海が見えた。穏やかに風いだ、真つ青な海だった。何を見ても、懐かしい思い出に吸い寄せられそうになる。ぼくは心に固く蓋をして、海に背を向ける。

林の雪は深かった。折れた枝や、固い切り株のようなものがあって、思ったよりも歩きにくい。突然、林のなかから、一羽の野鳥が鋭い声を発して飛び立った。立ち止まり、物音に耳を澄ませた。静かだった。まるでこの世界から、誰もいなくなってしまったみたいだった。目を閉じると、近くの国道を走る車のチエーンが、鈴の音のように聞こえた。ここはどこなのか、自分が誰なのか、わからなくなりかけた。そのとき駐車場の方から、父がぼくを呼ぶ声が聞こえてきた。

峠を越えたあとは順調だった。車は予定通り空港に到着し、ぼくたちは搭乗手続きを終えてゲートに進んだ。

「よろしくお願いします」父がアキの両親に言った。

「こちらこそ」アキの父親はにこやかに答えた。「朔太郎くんと一緒に来てもらって、アキも喜んでいると思います」

ぼくはアキの母親が抱えている小さな壺に目をやった。美しい錦織の袋にくるまれた壺、そのなかに本当にアキはいるのだろうか。

飛行機が飛び立つと、ほどなく眠りに落ちた。そして夢を見た。まだ元気だったころのアキの夢だ。夢のなかで彼女は笑っている。あのいつもの、ちよつと困ったような笑顔で。「朔ちゃん」と、ぼくのことを呼ぶ。その声も、はつきり耳に残っている。夢が現実で、この現実が夢ならいいと思う。でも、そんなことはありえない。だから目が覚めたとき、ぼくはいつも泣いている。悲しいからではない。楽しい夢から悲しい現実に戻ってくるときに、^{また}過ぎ越さなくてはならない亀裂があり、涙を流さずに、そこを越えることができない。何度やってもだめなのだ。

飛び立ったところは雪景色だったのに、降り立ったところは真夏の太陽が照りつける観光都市だった。ケアンズ。太平洋に面した美しい街。椰子の木が繁るブロムナード。湾に

面して建つ高級ホテルのまわりには、むせかえるような熱帯植物の緑が溢れ、栈橋には大小のクルーズ船が係留されている。ホテルへ向かうタクシーは、海岸沿いの芝生の横を走った。たくさんの人たちが、夕暮れの散歩を楽しんでいた。

「ハワイのようね」アキの母親が言った。

ぼくには呪われた街に思える。何もかも、四ヵ月前と同じだ。四ヵ月のあいだに季節は進み、オーストラリアでは春のはじめが夏の盛りになった。それだけだ。ただ、それだけのことなのだけだ。

ホテルに一泊して、翌日の午前の便で出発することになっていた。時差はほとんどないので、日本を出たときの時間が、そのまま流れている。夕食のあと、自分の部屋のベッドに寝ころび、天井を見上げてぼんやりしていた。そしてアキはいないのだ、と自分に言い聞かせた。

四ヵ月前に来たときも、アキはいなかった。彼女を日本に残して、ぼくたちは高校の修学旅行でここにやって来た。オーストラリアに近い日本の街から、日本に近いオーストラリアの街へ。このルートだと、飛行機は燃料補給のために、途中でどこかの空港に立ち寄る必要がない。奇妙な理由によって、人生のなかに入り込んできた街。美しい街だと思った。何を見ても物珍しく、奇妙で新鮮だった。それはぼくが見るものを、アキと一緒に見ていたからだ。でも、いまはどんなものを見ても、何も感じない。ぼくはいったいここ

で、何を見ればいいのかだろう。

そういうことだ、アキがいなくなるということは。彼女を失うということは。ぼくには、見るものが何もなくなくなってしまった。オーストラリアでもアラスカでも、地中海でも南氷洋でも。世界中どこへ行こうと同じことだ。どんな雄大な景色にも心は動かないし、どんな美しい光景も、ぼくを楽しませない。見ることに、感じることに……生きることに動機を与えてくれる人がいなくなってしまった。彼女はもうぼくと一緒に生きてはくれないから。

ほんの四ヵ月、季節が一つめぐるあいだの出来事だった。呆気なく、一人の女の子がこの世界から消えてしまったのは。六十億の人類から見れば、きっと些細なことだ。でも六十億の人類という場所に、ぼくはいない。ぼくがいるのは、たった一つの死が、あらゆる感情を洗い流してしまうような場所だ。そういう場所に、ぼくはいない。何も見えない、何も聞かない、何も感じないぼくがいる。でも本当に、そこにいるのだろうか。いないとしたら、どこにいるのだろうか。

アキとは中学二年生のときに、はじめて同じクラスになった。それまでぼくは彼女の顔

も名前も知らなかった。気まぐれな偶然から、ぼくたちは九つもあるなかの同じクラスに編入され、担任から男女の学級委員に任命された。学級委員としての最初の仕事は、新学期になってすぐに足を骨折した大木^{おおき}というクラスメートを、入院している病院にクラスの代表として見舞うことだった。途中、担任とクラスの全員から集めたお金で、クッキーと花を買った。

大木は足に大袈裟^{おおげさ}なギブスをはめられて、ベッドの上にひっくり返っていた。始業式の翌日に入院してしまったこの級友のことを、ぼくはほとんど知らなかった。それで病人との会話は、一年生のときも彼と同じクラスだったアキに任せて、四階にある病室の窓から街を眺めていた。バス通りに沿って花屋や果物屋や菓子屋などが並び、こぢんまりした商店街を形作っている。それらの街並みの向こうに城山が見えた。新緑の木々のあいだから、白い天守閣がわずかに顔を覗^{のぞ}かせている。

「松本^{まつもと}はさあ、下の名前、朔太郎^{さくたろう}っていうんだらう」それまでアキと話していた大木が、突然話しかけてきた。

「そうだけど」ぼくは窓辺から振り返った。

「こういうのってたまらないよな」と彼は言った。

「何がたまないんだよ」

「だって朔太郎^{さくたろう}って、萩原朔太郎^{はぎわら さくたろう}の朔太郎^{さくたろう}だらう」

ぼくは答えなかった。

「おれの下の名前、知ってる？」

「龍之介りゅうのすけだろう」

「そう。芥川龍之介あくたがわ」

ようやく大木の言わんとするところがわかった。

「親が文学かぶれだったんだね、お互いに」彼は満足そうに頷うなずいた。

「うちの場合はおじいちゃんだけだね」とぼくは言った。

「おまえのじいちゃんがつけたのか」

「ああ、そうだよ」

「迷惑な話だよな」

「でも龍之介でまだよかったじゃないか」

「どうして」

「金之助きんのすけとかだったらどうするんだよ」

「なんだ、それは」

「夏目漱石なつめ そうせきの本名だよ」

「へえ、知らなかった」

「もしおまえの両親の愛読書が『こゝろ』とかだったら、いまごろおまえは大木金之助だぞ」

「まさか」彼はおかしそうに笑いながら、「いくらなんでも息子に金之助なんて名前はつけないよ」

「たとえばの話だよ」とぼくは言った。「仮におまえが大木金之助だったとするよな。そしてたらおまえは学校中の笑いものだ」

大木はちよつと浮かない顔になった。ぼくはつづけた。

「おまえは自分にこんな名前をつけた親を恨んで家を飛び出すだろう。そしてプロレスラーになるんだ」

「なんでプロレスラーなんだよ」

「大木金之助なんて、プロレスラーにでもなるしかなさそうな名前じゃないか」

「そうかな」

アキは持ってきた花を花瓶に活けていた。ぼくと大木はクッキーの箱をあけて食べながら、しばらく文学かぶれの親の話などをつづけた。帰るときに、大木は「また来てくれな」と言った。

「一日寝とくのは退屈だからさ」

「そのうちクラスの連中が交替で勉強を教えにくるよ」

「そういうことはしてくれなくていいんだけど」

「佐々木さんたちも協力するって言ってたわよ」アキはクラスでも美少女の誉れ高い女の

子の名前をあげた。

「いいな、大木は」ぼくがからかうと、

「おおきなお世話だ」と面白くもない洒落^{しゃれ}を言っ、一人で笑った。

病院の帰りに、ぼくはふと思いついて、城山に登ってみないかとアキを誘った。部活に顔を出すには遅すぎるし、真^まっ直^すぐ家に帰っても、夕食までにはまだ時間がある。彼女は「いいわよ」と言っ、気軽に付いてきた。城山の登り口は北側と南側に二箇所ある。ぼくたちが登りはじめたのは南側だった。北側を正門とすれば、こちらは裏門にあたるため、道は細く険しく、登山者も少ない。途中に公園があり、そこで二つの登山道が合流するようになっている。ぼくたちは話らしい話もせず、ゆっくり山道を登っていった。

「松本くん、ロックとか聴くんでしょう」横を歩いているアキがたずねた。

「うん」ぼくはちらりと振り向いた。「どうして?」

「一年生のときから、友だちとよくCDの貸し借りしているのを見かけてたから」

「広瀬^{ひろせ}は聴かないのか」

「わたしはダメ。頭のなかがぐちゃぐちゃになっちゃう」

「ロックを聴くと?」

「そう。給食のカレー・ビーンズみたいになっちゃうの」

「ふーん」

「松本くん、部活は剣道よね」

「ああ」

「今日は練習行かなくていいの？」

「顧問の先生に休部届けを出してきた」

アキはしばらく考えて、「でも変よね」と言った。

「部活で剣道やってる人が、家ではロックを聴いてるなんて。なんかイメージがぜんぜん違うもん」

「剣道で相手の面やなんかを打つとスカツとするだろう。だからロックを聴くのも同じだよ」

「いつもはスカツとしてないの？」

「広瀬はスカツとしてるのかよ」

「スカツとするっていうのが、わたしにはよくわからないけど」

ほくにもよくわからないけど。

そのときは二人とも、中学生の男女として節度ある距離を保ちながら歩いていた。にもかかわらず彼女の髪からは、シャンプーというかりンスとか、ほんのり甘い匂においが漂ってきた。鼻のもげるような防具の匂いとは、えらい違いだ。こういう匂いを年がら年中

身にまどって生きていると、ロックを聴いたり竹刀で人を叩いたりという気分にはならないのかもしれない。

登っていく石段は角が丸くなり、ところどころ緑色の苔が生えていた。石の埋まっている地面は赤土で、一年中湿っているように見える。突然、アキが足を止めた。

「アジサイだ」

見ると山道と右手の崖のあいだに、一群のアジサイが葉を繁らせていた。すでに十円玉くらいの花の赤ちゃんをたくさんつけている。

「わたし、アジサイの花って好き」彼女はうつとりした表情で言った。「花が咲いたら一緒に見にこない？」

「いいけど」ぼくはちょっとあせって、「とにかく上まで登ろうぜ」と言った。

3

ぼくの家は市立図書館の敷地内にある。本館に隣接した二階建ての白い洋館は、ほとんど鹿鳴館か大正デモクラシーかという代物だ。真面目な話、この建物は市の文化財に指定されていて、居住者は勝手に改修工事などをしてはならないことになっている。文化財と言えば有り難そうだが、住んでいる方としては、有り難くもなんともない。現に祖父な

どは、年寄りには住みにくい家だとか言つて、一人でさつさと中古マンションに移つてしまつた。年寄りに住みにくい家は、老若男女を問わず住みにくいきまつている。こういう酔狂は父の宿病みたいなもので、ほくの見るところ、母もかなりこの病氣に侵されてゐた。子供にとってはいい迷惑だ。

どういふ事情で、一家がこの家に住むようになったのか知らない。父の酔狂を別にすれば、きつと母が図書館に勤めてゐることと関係があるのだらう。それとも昔なんとか議員をしてゐた祖父の手づるによるものなのか。どっちにしても、この家にまつわる忌まわしい過去など知りたくもないので、わざわざたずねてみたことはない。家と図書館のあいだは、最短で三メートルほどしかない。そのため二階にあるほくの部屋からは、窓際の机に坐つてゐる人の本が一緒に読める、というのは嘘^{うそ}だけだ。

こう見えてもほくは孝行息子なので、中学に入つたころから、ときどき部活の暇なときに母の手伝いをするのがあつた。たとえば土曜の午後や日祭日など、利用者の多い日は、貸出カウンターで本のバーコードをコンピュータに入力したり、返却された本をワゴンに積んでもとの本棚に戻しにいたり、『銀河鉄道の夜』のジョバンニなみの勤勉さなのである。もちろん母子家庭ではないし、ボランティアをやっているわけでもないから、日当はもらう。もらったお金は、ほとんどがCD代になつた。

ほんとアキとは、その後も男女の学級委員として、過不足のない関係をつづけていた。一緒にいる機会は多かったが、とくに異性として意識したことはなかった。むしろ近すぎる距離のために、アキの魅力に気づかなかったのかもしれない。そこそこに可愛くて性格が良く、勉強もできる彼女のファンは、クラスの男子のなかにもたくさんいた。そしてほかはいつのまにか、彼らの妬みと反感を買うことになっていた。たとえば体育の時間にバスケットやサッカーをすると、かならず意図的にぶつかってきたり、足を蹴飛ばしたりするやつがいる。あからさまな暴力ではないが、相手の悪意はちゃんと伝わってくる。最初のうちは理由がわからなかった。ただぼくを嫌っているやつがいる。なぜか自分は嫌われていると思うと、それなりに傷ついた。

長いあいだの気がかりは、つまらない事件によって呆気なく氷解した。二学期の文化祭で、二年生はクラスごとに劇をしなければならない。ホームルームの時間に投票をした結果、女子の組織票がものを言って、うちのクラスは『ロミオとジュリエット』をやることになった。そしてジュリエット役は、結束した女子の推薦によってアキが、ロミオ役は、誰もやりたがらないことは学級委員がやるという不文律に従ってぼくが、それぞれ演ずることになった。

女子主導のもと、練習は和気あいあいとした雰囲気の中で進んだ。窓辺のシーンでジュリエットが、「ロミオ、ロミオ、なぜあなたはロミオなの。お父上に背き、その名を捨

てください。それができないなら、せめて愛の誓いを……」と告白する場面は、もともと真面目なアキが真面目に演じる可笑しさがあつたし、特別出演の女校長を乳母役にして、「間違いございません。生娘だったわたしの十二の歳にかけて誓います」という、原文どおりの台詞を言わせるところは、全員が爆笑だった。ジュリエットの寝室で二人が朝を迎え、「外が明るくなれば、二人の心は暗くなるのだ」とロミオが呟いて立ち去る場面には、ちゃんとキス・シーンが設けてあつた。引き止めるジュリエット、後ろ髪を引かれるロミオ、二人は互いに見つめ合い、バルコニーの手摺を隔ててキスをする。

「おまえ、広瀬とあんまりいちゃいちゃすんなよな」と彼は言った。

「ちよっと勉強ができるからと思って、いい気になんな」別のやつが言った。

「なんのことだよ」とぼくは言った。

「うるさい」一人がいきなり腹を殴った。

ただ威嚇するだけのような殴り方だったし、こちらも反射的に力をこめたので、ダメージはほとんどなかった。二人はそれで気が済んだのか、不意に踵を返すと、肩を怒らせるようにして去っていった。ぼくはというと、屈辱よりも、むしろ長く気にかかっていた不安が取り払われたような爽快さを感じていた。アルカリ性に反応した赤いフェノールフタレイン溶液に、酸性の液体を適量加えると、中和反応が起こって水溶液が透明になる。そんなふうにして、世界が清明に澄み渡った。思いがけずもたらされた答えを、もう一度胸